

文学の授業と人間形成

一般に、文学の授業では、作品を正しく「理解」することが、一応の到達点になっている。いわく「主題をとらえる」、いわく「登場人物の心理を読みとる」、いわく「場面の展開や構成をとらえる」等々。

しかし、私たちが、普通、文学作品を読むときは、こういうふうにはなっていない。作品を読み進めながら、あるいは読み終わって後も、作品世界のなにかと自己とを結びつけ、からみ合わせて、なんらかの「働きかけ合い」をしているわけである。文学作品を読むことのおもしろさの大半は、この「働きかけ合い」にあると言ってもよい。ところが、文学の「授業」となると、この肝心の「働きかけ合い」のところは、ほとんどとりあげられることがない。文学作品を授業でとりあげるとつまらなくなると言われる原因の一端も、案外、こんなところにあるのかもしれない。

こんなことを感じ続けていたところ、この問題意識にびびったりの好著が出た。本書である。著者は、「まえがき」に当たる部分で、次のように述べている。

私は、三重に来て以来（注、一九七一年以来）さまざまな実践に触れました。そしてその間、文学作品に接することによって子どもたちの内面に何かの変化が確実に起こっているという事実を目をとめてきました。それが何かを明らかにすることが、ここ一〇年間の私の営みであったかと思えます。この本は、いわばその解答の第一次報告ということになるうかと思えます。（四ページ）

著者は、この一〇年余にわたる模索の結果、八価値葛藤・変革の文学教育Vという理念にたどりつく。

考えてみれば、文学は我々の日常的な感覚・思想と鋭く対決するものを本来持っているはずで、だからこそ文学を読むことが、単

なる楽しみ以上のものを人間にもたらすはずなのに、私たちは、授業において、文学の思想と子どもとの思想とを丸ごとに対決させることを意外にも忘れ去っています。あるいは、意識的にか無意識的にか避けているのです。教材研究にあたっては、作品の精密な分析にとどまるのでなく、その基本において、作品の思想（作品が内包している価値観）と生徒の思想（生徒の価値観）がどこで鋭くぶつかり合うのかを見ずしておかなければなりません。その両者の価値観が葛藤していきなりさまたげ文学の授業なのではないかと私は考えるようになりました。（二一九ページ）

著者の提唱するこの理念は、本書を貫く根本理念とみてよい。

しかし、著者は、この八価値葛藤・変革の文学教育Vの理念を抽象的に一般的に展開しているのではない。教材の一つ一つを通して、いくつものすぐれた実践を通して、実に具体的に述べている。本書のおもしろさのもう一つの理由は、この具体性の中にある。

本書は、第一部の教材論と第二部の授業論とから成っており、とりあげられている教材の大部分は、文学読本『はぐるま』（部落問

題研究所刊)所収の文学作品である。

第一部の教材論では、「こぶとり」「かさこじぞう」「ごんぎつね」「最後の授業」「故郷」等々に即しながら、教材分析の視点と方法が述べられている。その中には、従来の教材論・教材解釈を確実にこえていると思われるところや、定式化されつつある教材分析の視点に再検討を迫る見解も数多くみられ、読者も思わず身を乗りだしてしまう。

第二部の授業論では、著者の接した三重県下の授業や、著者自身による授業がとりあげられ、それらがかなりくわしく記述されているとともに、△価値葛藤・菱革▽という著者の主張が具体的に展開されている。著者は、まず作品の正しい理解、それから「どう思うか」へ、という段階論を否定して、「どう思うか」を軸に、「正しい理解」をも統合していくべきだと主張しているのである。

著者は、三重大学に赴任するとき、「最初の一〇年は現場を知る時期、次の一〇年は開拓する時期、最後の二〇年は成果をまとめる時期」という計画を持っていたという。その計画にあてはめれば、本書はその開拓期のスタートに位置することになるが、本書の実質

も、まさに「開拓」の名にふさわしい。私たち読者もまた、この開拓の事業に加わらねばならないだろう。(B六判二四七ページ、昭和五六年一月二〇日、部落問題研究所出版部刊 一、〇〇〇四)
(大槻和夫)